

# 『沈黙』論

— 神の沈黙と人間の沈黙 —

來村 明子

## 一、日本とキリスト教

遠藤周作は、佐藤泰正氏との対談において「私は大学の時から『神々と神と』(昭二十二)とか『堀辰雄論覚書』(昭二十三)とかで自分の命題として」「日本とキリスト教」の問題を取り上げていたと述べている<sup>(註1)</sup>。この「日本とキリスト教」の問題を文学を通して提起することが、遠藤の初期の作品のテーマであつたといえる。当時の遠藤はこのことについて次のように述べている。

僕たちにはカトリシズムによる思想的克服が、直接全能者を信ずる事にはなりません。時にはカトリシズムを知らば知る程僕たちは神々の子としての血液がざわめき叫ぶのを聴かねばならぬのです。<sup>(註2)</sup>

受け身的である事、生への能動的反抗と或は神への反抗の否定は容易に汎神的世界に通ずる。汎神世界は神的なるものは人間的なるものの拡大延長である故に、人間的なるものは神的なるものに直接的に吸収される事を願ひ、何らの反抗も異質的なものの克服のための戦ひもない。汎神論者は自己と存在同質的な神的なるものに反抗する必要を認めない。<sup>(註3)</sup>

遠藤は、日本人に潜む奥深い汎神性を自分自身に感じながら、それでも「『神の世界』への旅には『神々の世界』に誘惑させられ苦しめられる事なしには行けない」と、その誘惑を克服する戦ひが必要であると考えていたよ

うである。佐藤氏がまとめるように、昭和二十年代初めにおいては「汎神論と一神論の相剋は、遠藤周作が自身の文学の起点にみずから置いた不拔の課題」<sup>(註4)</sup>であつたと見てよい。だから、このテーマが初期の『アデンまで』(昭二十九)『黄色い人』(昭三十)『海と毒菓』(昭三十二)などにも出現し、そこでは日本人やその社会における汎神の感性や汎神的世界観を徹しく問いかけてきたと評してもよいだろう。

ところが『沈黙』(昭四十一)を書くにあたって、遠藤は『海と毒菓』以後自分の気持ちに大分変化が起こつたと述べている。「汎神論ということでは、バサツと切るといふのがこの十年くらいに」「自分の書き方であつたが、そのような「ないないづくしにはもう耐えられない。たとい間違つていても、何とか踏み石を置いて」渡つてゆきたい<sup>(註5)</sup>として、遠藤自身としては、汎神論から一神論への掛け橋となるものを模索し始めたことと認識しているようだ。その意味では、『沈黙』は「日本とキリスト教」の間に遠藤が大きな踏み石を置こうと試みたものであり、遠藤文学の要の作品であるといえる。

## 二、『沈黙』への批判

『沈黙』は直接的に神そのものを描いて、日本人における「神」の問題を提起した点において非常に画期的な作品であるといえるが、「神」を直接描いたがゆえ多くの批判が生まれた。

キリスト教を日本に伝えるために来日した司祭ロドリゴであるが、残酷な

拷問の末にみじめに死んでいく信者に対して、沈黙し続ける神をどう理解しているのか混乱し始める。そして、信者を穴吊りの刑から救うことと引き換えに、ついに転び、神を棄てる。その証である「踏絵の場面」が「沈黙」において多数の論をよんだ部分である。ロドリゴが踏絵に足をかけようとしたまさにその直前に、ロドリゴには神の声が聞こえる。

その時、踏むがいいと銅版のあの人は司祭にむかつて言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。

キリスト教徒にとつて絶対的な存在である神が「踏むがいい」と棄教することを認める発言を一人の人間にするという行為を描くことは、いきすぎであるという批判が主なものである。亀井勝一郎氏は「この場合、最後までキリストをして沈黙せしめよ（ロドリゴの発言を封ぜよということだ）」と批判し、「ロドリゴ自身の沈黙」、つまりは「委ねる」態度が必要であると述べている<sup>(註)</sup>。また、大岡昇平氏は、「踏絵に刻まれたキリストの顔が、踏むがよい、といったというのは感動的場面になるが、作者の筆は棄教者の怯懦を正当化する幻想という世俗的解釈を排除する説得力を持っていない」とし、リアリティーの欠如を指摘している。更に、三島由紀夫氏は「神の沈黙を沈黙のまま描いて突っ放すのが文学ではないか？」と文学のあり方の点から疑問を投げかけている<sup>(註)</sup>。このように、神を「沈黙」させたままで描くべきであった、というのが批判の中心であった。しかし、作者は神の沈黙を破るところまで書き進めた。確かに、前にあげたロドリゴに対する神の声を声として描くことは、大岡氏が指摘するように「棄教者の怯懦を正当化する幻想という世俗的解釈を排除する説得力」に欠けているといえるだろう。

『沈黙』は、前半のロドリゴの書簡（一章〜四章）と地の文（五章、六章）、そして切支丹屋敷役人日記に分かれているが、先に引いた神の声が聞こえる部分は五章の地の文である。この部分は、神である「あの人」と「司祭」、そして、それを語る「語り手」の（声）という三つの要素から構成さ

れている。これまでは、「語り手」は場面を説明する役割をしか担っていないが、ここでは「司祭」の意識内部に入り込む。「自分は今、自分の生涯の中で最も美しいと思つてきたもの、最も聖らかと信じたもの、最も人間の理想と、夢にみたされたものを踏む。この足の痛み。」と、愛するものを踏まなければならない「足の痛み」を感じているものは「司祭」であるが、ここでは「語り手」の（声）が強く響いてくる。「司祭」がおそらく説明できない無意識の部分で「語り手」が語ることになるわけで、結局、神の声がどこから生まれてきたものなのかわからない曖昧さが残される。ロドリゴの無意識にある神に対する期待から生まれたものならば、それは神の声ではなくロドリゴの声であるという指摘も不可能ではない。その神はロドリゴの想像にすぎないかもしれないのだ。

しかし、『沈黙』という作品で重要なのは、六章の最後の場面で神とロドリゴの対話を遠藤が描いている点であろう。遠藤は神が「沈黙」を破ることに、躊躇を感じていないのである。六章で再び聞こえる神の声に作者は「棄教者の怯懦を正当化する幻想という世俗的解釈を排除する説得力」（前掲、大岡）を持たせようと試みていることがうかがえる。

「主よ。あなたが沈黙していられるのを恨んでいました」

「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」

「しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去つて、なすことをなせと言われた。ユダはどうなるのですか」

「私はそう言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言つたのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから」

ここでは、神とロドリゴは完全に別な存在として対話形式で書かれている。ロドリゴが「踏絵を踏むことを許す神」を「私の主」として発見しているがために、この場面では、ロドリゴと神に対話が可能になるのだ。そして、井上筑後守との対決において、神が強い者だけに救いを与えるような存在ではなく、踏絵を踏んだ者の「足の痛み」も理解し、分かち合ってくれる

ものであることをはっきりと認識するのである。このように、「語り手」がロドリゴの意識を媒介していた五章に比べて、この六章の神の声はロドリゴと対話の関係を築くところまで発展しているのである。

また、五章の踏絵の場面で、「こうして司祭が踏絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた。」という部分に注目したい。聖書においてイエスは、弟子ペテロが二ワトリが鳴く前に三度自分を知らないと言うだろうと予言した。このことは作中にも書かれているが、このことと重ねてみると、この時点でロドリゴは裏切り者であることに変わりはないのである。佐藤氏は「これがキリストへ裏切りであるかとはまた、作者の問うところでもある」と述べるが、ここは「裏切り」であると読んだ方が最後の対話部分が生きてくるのではないだろうか。作者は、神の許しの声をロドリゴに聞かせながらも、それでも踏絵を踏むという行為がキリスト教徒にとって裏切りには違いないということを、明確に描いているといえる。

しかし、六章の神と対話するロドリゴは、踏絵を踏んだときに「烈しい悦びと感情」を感じている。「烈しい悦びと感情」を感じた瞬間に、遠藤はロドリゴを「裏切り」から初めて解放した。神の存在を確信し、対話するまでにその関係が接近したとき、ロドリゴは彼の神を獲得したといえる。『沈黙』は、「神の声」が問題となるが、ロドリゴにとっては、その声を完全に自分の裡に獲得するまでの過程が重要であったといえ、遠藤はこの神の声をロドリゴに確信させる点に力を入れたと思われる。真の神を発見したロドリゴは、ここではキリスト教徒としては裏切り者であっても、彼の神は裏切っていないのである。

だが、信者が拷問に苦しんでいても「沈黙」を続ける神の真意が、神の声自身で語られるという作者の手法は、神を相手にしてここまで書いてもいいのかという疑問を生じさせるのは当然であろう。では、先に引いたいくつかの評論の中で言っているような『沈黙』で提出された問題、日本におけるキリスト教の問題は神が口を開くことで解決されているのだろうか。日本とキリスト教の掛け橋を探るといふ大きなテーマであったにもかかわらず、この

小説はロドリゴと神という範囲でのみ有効であるように感じられる。遠藤は、そのような狭い範囲でこの小説を書いたのではないだろう。とすれば、『沈黙』の主題は別に存在するとみななければならない。亀井氏はこの作品は「切支丹の殉教をめぐって神の实在を問う」ものとして画期的であるとしている。また、河上徹太郎氏は『沈黙』の主題を二つあげている。一つは「思いがけなく師フェレイラに遭わされ、今は日本人になった彼の口から日本のキリスト教の可能性の問題を聞くロドリゴの抵抗」であり、もう一つは「フェレイラのいう日本のキリスト教の可能性の問題」である。どちらも、根底にあるのは「神の沈黙」の問題であり、これが従来の『沈黙』の読み方であるといえる。しかし、『沈黙』は神の实在を証明しているといえるだろうか。また、「神の沈黙」は本当に『沈黙』において中心となる問題であろうか。

### 三、神の沈黙と人間の沈黙

神の实在の問題についても、「神の沈黙」の問題についても、実際に神の声を聞き、神と向き合うことで心の平安を持ちえているのはロドリゴだけである。例えば、何回も裏切りながらも最後までロドリゴの後をついてきたユダ的な存在であるキチジローや、布教を断念せざるをえなかったフェレイラ、一度は洗礼まで受けながらも、日本という泥沼に神を植えつけることの不可能さを知り棄教した井上筑後守などにはまったくその声は届いていない。数多くの、悲惨な死をとげた信者たちにとっても、結局最後まで神は沈黙し続け、信者たちを救う存在ではなかった。ロドリゴだけに、神の存在を確信させることにあまり意味はないだろう。神が沈黙していたかそうでなかったかは、文学として描こうとする場合どうしてもリアリティーに欠けることには避けられない。遠藤自身述べているように、神そのものを描くことは不可能であり、キリスト教徒にとつて許されることではない。人間に書けるのは、人間から見た神の姿でしかないのである。しかし、『沈黙』において、遠藤はすべてを描こうとしているように思われる。それは、日本とキリスト

教の問題をつきつめて更に発展させるためには、一度は渡らなければならぬ踏み石であったように感じられる。『沈黙』以降の作品、例えば『死海のほとり』（昭四十八）や『深い河』（平五）などでは、遠藤は神を直接に描くのではなく、人間から見た神の姿を描くことを心がけている。

しかし、『沈黙』の中心が「神の沈黙」の問題や神の存在の問題であるかという点、そうではないのではないか。「神」を描いたことが注目を集めるが、そこには様々な人間の信仰に対する情熱や苦悩が描かれており、「神の沈黙」の問題というよりは「人間の沈黙」の問題であるのではないだろうか。神を信じることを、神の存在を疑うこと——この両者の葛藤に信者たちはその苦悩を口にするようになる。その代表としてキチジローや井上筑後守があげられるだろう。日本人の仏教の観念から考えると、井上筑後守がロドリゴに「どうにもならぬ己れの弱さに、衆生がすぎる仏の慈悲、これを救いと日本では教えておる」と述べるように、仏教を通しての絶対者と人間の関係には葛藤は生まれようがないのである。そこには、キリスト教における神のようなものは必要とされない。人間は仏にすぎず、自分の運命を仏にあずけることで救いを感じ、心の安静を得るからである。しかし、キリスト教の救いは「デウスにすぎるだけのものではなく、信徒が力の限り守る心の強さがそれに伴わねばならぬ」といふ。そこで備えなければならぬとされる、「心の強さ」が、日本の風土に生きる信者であるがゆえの固有の、信仰と棄教との狭間で揺れ動かざるをえない苦悩を出現させるのである。キチジローはロドリゴに次のように訴える。

「この世にはなあ、弱か者と強か者のござります。強か者はどげん責苦にもめげず、ハライソに参れましようが、俺のように生れつき弱か者は踏絵は踏めよと役人の責苦を受ければ……」

ここで遠藤は、キリスト教における強者と弱者の問題を提起している。『沈黙』では、はじめ強者はロドリゴであり、弱者はキチジローであった。ロドリゴは、キチジローに出会ったときに自分と同じ信仰をもつ人間だとは思えないと語っている。「いや、そんなことはありえない。信仰は決して一人の

人間をこのような弱虫で卑怯な者にする筈はない」と考えるロドリゴにとつてキチジローは軽蔑すべき人間であった。このように、キリスト教という信仰はどんな人間でも強くすると考えているロドリゴにとつて、何故キチジローが切支丹でい続けるのか疑問であつただろう。しかし、キチジローは、ロドリゴを売つた後もロドリゴの後をついてまわり、切支丹に戻つてはまた転ぶということを繰り返す。

このキチジローのように弱い者は、キリスト教徒でいる必要はないようにも感じられる。強い心を持たないものは棄教し、仏教に戻れば平和であるともいえるだろう。しかしそこに遠藤は疑問をもち、ロドリゴに「基督教とはあなた（井上筑後守、來村注）の言うようなものではない」と叫ばせようとするのである。ロドリゴがこのように叫ぼうとするのは、キチジローと同じ信仰をもつ人間だとは思えないと感じていた彼とは全く違う方向性を持つようになつていくといえる。これはキリスト教とは強い者だけを選抜して信じさせる宗教なのか、そもそも、宗教がそのように人を選ぶことが許されるのかという、素朴だが根本的な遠藤自身の疑問に淵源し、遠藤はここでその問題を問うているのだ。この疑問をロドリゴが持つことによつて、遠藤は人間の強者と弱者の双方を包み込むようなキリスト教のあり方を提示した。そして、キチジローのように何度も神に背くような人間にも、神を求めようとする行為を続けている意識に、神が救いの手を差しのべることを描こうとしたといえる。

ロドリゴと井上筑後守の対決の場面で、「仏の慈悲と切支丹デウスの慈悲」の違いについて遠藤は正面から立ち向かつているが、風土的に自然に受け入れられている仏教と、「心の強さ」を求められるキリスト教の大きな違いは「沈黙」のあり方である。仏教は、日本においてすべてを受け入れる宗教であり、人間は仏の存在に対して何も問わなくてよいし、考えなくてもよい。仏に自分を委ねることに救いを感じ、そこに疑問や葛藤は生じないのである。人間が仏の前に「沈黙」することは自然な形であるといえる。

しかし、キリスト教には神に対する決断が必要である。神に身を委ねるた

めには、自分自身を見つめ、その生き方を語らなければならぬ。『沈黙』においては、ロドリゴ、キチジロー、井上筑後守、そして多くの切支丹の神に対して語ることが重要であるといえるだろう。それは、宗教の意義であったり、くじけそうになつたときのお互いの励ましであったり、神に対する恐ろしい疑いであつたりするであろう。そこには必然的に戦いが生まれる。それに勝とうが負けようがその結果が問われるのではなく、戦おうとすることが求められているのである。その意味で、キチジローも井上筑後守もたとえ最終的に神を棄てたとしても沈黙していなかつたことで救われるのではないだろうか。キリスト教では絶望することが一番重い罪であるとされているように、そこに悲嘆があつても自己内面において苦しみ葛藤したことと救われる、それが遠藤のキリスト教のとらえ方であり、キリスト教でなければならぬ理由があるのではないだろうか。ここに遠藤は、日本とキリスト教をつなぐ踏み石を置こうとしたと考えられるのである。

神の沈黙と人間の沈黙について、昭和三十四年に書かれた『最後の殉教者』という短編を見てみたい。『沈黙』より七年前に書かれた作品であるが、『沈黙』の下敷きになっているものといえるだろう。長崎の中野村に住む喜助は、体は大きいが臆病な人物である。中野村が「きりしたん」の信仰を守る部落であつたため喜助も信者であるが、他の村人たちのような信仰心はまったくなく、すぐに「かんにんしてくれのう。かんにんしてくれのう。」としりごみして逃げ出してしまふ。そして、「喜助はいつかこの臆病ゆえに、ゼズス様を夏切るユダのごとなるかもしれないのう」という村人の言葉通り、迫害にあつて降参し、あつというまに棄教してしまふ。残つた信者たちは、かたくなに棄教を拒みながらも、徐々に疑問が生じてくる。それは、小さな子供が責苦を忍ぶのを黙って見ている神に対しての疑念であり、子供を死なせてまで保持しなければならぬ信仰の意義への苦悩であつた。そんな苦しい時期に、喜助が戻ってくるのである。喜助はみんなを裏切つた後ろめたさに苦しんでいたとき、ロドリゴと同じように神の声を聞いていた。

「みなと行くだけでよか。もう一べん責苦におうて恐ろしかなら逃げ戻

つてもいい、わたしを裏切つてもよかよ。だが、みんなのあとを追つて行くだけは行きんさい」

「わたしを裏切つても」よいという神の言葉も、論議をよぶ内容であろう。しかし、「みんなのあとを追つて、行くだけは行き」なさいという言葉は何を意味するだろうか。それは、最後に甚三郎が喜助にかけた言葉に示されている。

「苦しければころんで、ええんじゃぞ。ころんで、ええんじゃぞ。お前がここに戻つてきただけでゼズさまは悦んどられる。悦んどられる。」

この甚三郎の言葉は、何よりも喜助を勇気づけ、励ましたのではないだろうか。それは、おそらく神の声よりも喜助の胸に届いたと思われる。神の声よりも人間の声が大きな意味をもつのは「連帯」という人間の喜びが関係しているだろう。そして「最後の殉教者」という題名どおり、おそらく喜助は二度と信仰を棄てることはないと思われる。神がもし沈黙していたとしても、人間が沈黙していなければ救いはある。そして、その人間を沈黙させておかないのは神なのである。そのような神が、作者の描こうとした神であつたと考えられる。このように、『沈黙』でも、神は人間たちに多くの言葉を語らせる。フェレイラとロドリゴは踏絵を踏むことによつてキリストとの新しい出会いを果たした。笠井秋生氏は「神は沈黙しているのではなかつた、神は確に存在するのだという彼等の確信は作者遠藤氏の確信」<sup>(註10)</sup>であると述べているが、果たして『沈黙』はこのような結論に導かれるものであるだろうか。神は沈黙していなかつたのにもかかわらず、この二人は孤独である。ロドリゴはフェレイラの背中を見つめながら、自分たちは「おたがいその醜さを憎み、軽蔑しあい、しかし離れることのできない双生児」のようだと感じていた。「会つておたがいの孤独をさぐりあう」ことを唯一のなぐさめとしていた関係である。神の存在を確信したにもかかわらず、何故この二人はこのような孤独な運命に流されるのだろうか。それは、おそらく神は沈黙していなかつたにもかかわらず司祭たちが沈黙してしまつたことに理由があるよう

に感じられる。井上筑後守から日本とキリスト教の宗教上の断絶を語られた時、ロドリゴはキリスト教とは井上筑後守の言うようなものではないと感じながらも、言っても無駄だという気持ちからそれを口にするのをやめてしまふ。つまり、自分が発見した新しいキリストとの出会いを広めることなく、その世界に自分だけ閉じ込めるような姿勢になつているのである。このような人間の沈黙に救いはない。『沈黙』をめぐる過去の言説は「神の沈黙」問題とその周辺に終始してきたが、この作品で読まれるべきは「人間の沈黙」だったのであるまいか。

注1、遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』（新潮社、平成七年四月）。

注2、遠藤周作『神々と神と』（「四季」第五号、昭和二十二年十二月）。

注3、遠藤周作『堀辰雄論覚書』（「高原」昭和二十三年三、七、十月）。

注4、佐藤泰正編『権名麟三・遠藤周作』（鑑賞日本現代文学第25巻）（角川書店、昭和五十八年二月）。

注5、「座談会 神の沈黙と人間の証言——遠藤周作『沈黙』の問題をめぐって——」（「福音と世界」昭和四十一年九月）。

注6、亀井勝一郎『長編小説『沈黙』の問題点——私は『沈黙』をこう読んだ——』（『沈黙』付録「感想」、新潮社、昭和四十一年三月）。

注7、大岡昇平・三島由紀夫「第二回谷崎潤一郎賞選後評」（「中央公論」昭和四十一年十一月）。

注8、注4に同じ。

注9、河上徹太郎「転んだ神父たち」（『沈黙』付録「感想」、新潮社、昭和四十一年三月）。

注10、笠井秋生「遠藤周作とキリスト教——『黄金の国』『沈黙』を中心に——」（「日本文芸研究」昭和四十三年九月）。